

自死相談 寺族女性に期待

本願寺派 小冊子作成し464カ寺配布

12年連続で自死者3万人超という社会にあって、「死にたい」と悩む人や遺族との接し方がわからないと苦慮する声が、寺族女性の間で上がっている。これを受け、浄土真宗本願寺派東京教区教務所(中央区・築地本願寺内)では先月、坊守(住職の妻)を主な対象とした小冊子「自死に向き合う」いま、私にできること」を作成。教区内1都8県の全464カ寺に配布した。門徒や参拝者の日常的な悩みに接する機会が多い寺族女性の研修会で、早くも小冊子活用の動きが出てきた。

同教区では3年ほど前に、自死問題専門委員会を設置。自殺対策に取り組み僧侶の会代表の藤澤克己氏(港区・安楽寺住職)を委員長に取り組みを進めてきた。その中で、坊守が「死にたい」と思いつめている様子の人が、どう声をかけていいのかかわからない「自死遺族との関わり方がわからない」と対応に苦慮している実態を把握。昨夏から小冊子の編纂に取りかかった。

内容は徹頭徹尾、対策現場サイドの視点で記述。当事者の声を収載し、どのような支援が求められているのか明記した。自死念慮が疑われる兆候として、「早朝・深夜にお墓参りに来る」「墓石の前に長い時間留まっている」「滞納していた門信徒会費を突然まとめて納入する」などを挙げ、実例として「予告なしで突然訪ねてきた知人が、その後お寺の境内で自死した。(50代男性)」「真夜中に電話があり、就職が難

しいと話した次の日に自死した。(20代男性)」などを示す。デザインも工夫し、女性の視覚に強く訴えるようにした。藤澤氏は3月中旬、内閣府に福島瑞穂自死対策特命担当大臣を訪問。その際、完成したばかりの小冊子を手渡し、福島氏はその見易さを絶賛したという。藤澤氏は「回答集ではなく、ともに『いのち』の問題を考えるためのヒントを書きました」と話している。希望者には1冊50円で頒布(☎03-3541-1666・F

日常の相談 住職より坊守が多く

AX03-3546-1860)。宗派を超えて活用できることから、他宗派や一般からも問い合わせが来ている状況だ。寺族女性会が研修会

この小冊子をテキストにした初めての研修会が9日、築地本願寺で開かれた。主催は千葉組寺族



小冊子では対応事例を具体的に示した

宅街にあるため、「待つだけで人は来ません」という環境。「看板などで」あなたの話、聞かせてください」と具体的に呼びかけていかないと相談活動に意欲を見せなかった。すでに青山さんの自坊では、今年1月から、毎月第4月曜日を「相談の日」に設定。日時を決めたのは、「その方が行きやすい」という門徒の声があったからだ。もちろん、他の曜日でも相談に応じる。

一方、藤田よしのさん(香取市・浄土寺坊守)の自坊がある佐原地区には、江戸時代から続く地縁があり、寺は昔も今も「よろず相談所」だ。「お寺さんだから言うけど」と、玄関先でよく悩む相談になります。日常的な悩みに接するのは、住職より坊守の方が多そうです。

そして今研修会の最大の収穫として、異口同音に「自分たちだけでは背負いきれない問題が出てきたとき、一緒に活動できる宗教者がいるとわかりました」と、ネットワークの安心感を挙げた。

お寺の窓口として親しまれる寺族女性。今、周囲の人々の「自死」や「うつ」のサインに気づき、適切に対応する地域密着のゲートキーパーとしての役割が期待されている。

女性会。藤澤氏を講師に招き、相談活動の実習などで理解を深めた。

今研修会を企画した青山柳子さん(船橋市・浄明寺坊守)は、「自死遺族と接するとき、励ましの言葉ではなく、寄り添う姿勢が大切なのだ」と

志穂さん(船橋市・浄興

寺教会)も、「門徒に私、最近うつっぽくて...なんて言われると、つい励ましの言葉を返していた。ひょっとしたら自死を考えているのかもしれない」と、直接聞いてみたいとわかりました」と語った。都市開教に取り組み渡辺さんの布教所は新興住